

# 飲食を伴うイベントにおけるリユース食器活用に向けた実証実験 報告書

東京都北区王子 1-11-1 北とびあ 1 階  
一般社団法人東京北区観光協会

## 1. 実証実験の概要

本実証実験は近年課題となっているイベント開催時における使い捨て容器の大量処分を背景に、環境負荷低減を目的として実施したものである。

飲食を伴うイベントにおいてリユース食器を導入することにより、廃棄物量の削減効果や運営面での課題、来場者および出店者の受け止め方を検証することを目的とした。

あわせて、今後同様のイベントにおいてリユース食器を継続的に導入するための課題整理および改善点の抽出を行うことも、本実証実験の重要な目的の一つである。

実証実験にあたり、リユース食器についてはカップに限ったものとした。理由としては、環境に対する研究等を行う一般財団法人地球・人間環境フォーラム様より、初回であればカップの導入が負担無く事業を行えるとアドバイスをいただいたことが挙げられる。

### 【イベント名・日時・開催場所】

イベント名 第4回飛鳥山ハワイフェスティバル 渋沢栄一×カラーカウア王のゆかりの地  
日程 令和7年10月18日(土)～10月19日(日)  
時間 9時45分～17時00分  
場所 飛鳥山公園

### 【参加・動員】

60,000名超 来場(主催者発表)  
参加ハーラウ数(フラ教室) 98組  
出店店舗 52店舗(飛鳥舞台物販27・飛鳥舞台飲食16・shibusawahat れすとらん館エリア物販7・shibusawahat れすとらん館エリア飲食2)

### 【運営構成】

・主催  
一般社団法人東京北区観光協会  
・共催  
株式会社文踊社 フラレア編集部  
・後援  
東京都北区/東京商工会議所北支部/ハワイ州観光局/城北信用金庫

## 2. リユース食器の配布・回収状況

配布業者数：5（飲食出店者：18）

配布数：2,200

※飲食で使用したもの+雨に濡れたことからレンタル業者により使用済みとして処理されたもの（個数の把握不可）を含む。

汚損破損数：87

未返却（紛失）数：60

配布業者属性（出店内容）	配布数
クラフトビール	400 個
沖縄料理	500 個
たこ焼き	1,000 個
レモネード	150 個
チキンオーバーライス	150 個
合計	2,200 個

本実証実験では、複数の飲食事業者に対してリユース食器を配布し、イベント期間中に実際の運用を行った。

配布数および回収状況については、運営スタッフによる回収対応および分別誘導を行いながら把握したものである。汚損・破損および未返却が全体の 6.68%となったが、初めての試行であったことを踏まえると概ね想定範囲内の数値であったと考えられる。

## 3. 廃棄物量の比較

### （1）昨年度

産業廃棄物（混載）

・ 廃プラスチック類 / 金属くず / ガラス等  
混載 29 袋

・ 産業廃棄物（廃プラスチック類のみ）  
100 袋

### （2）今年度

産業廃棄物（混載）

・ 廃プラスチック類 / 金属くず / ガラス等  
混載 98 袋

昨年度および今年度の廃棄物量については、イベント終了後に発生した産業廃棄物の実績を基に、ゴミ袋の数量を指標として比較を行った。なお、昨年度・今年度ともに来場者数は約6万人と同規模であり、ゴミの分別方法、回収体制、ならびに使用したゴミ袋のサイズはいずれも90Lで同一条件とした。

また、昨年度と今年度では産業廃棄物回収事業者が異なり、昨年度の重量が不明であることから、重量比較ではなくゴミ袋の数量比較となった。

このような条件を揃えた上で比較を行った結果、昨年度の産業廃棄物量は129袋であったのに対し、今年度は98袋となり、袋数ベースで31袋の減少が確認された。分別区分や回収方法に変更がないことから、当該減少は運営条件の違いによる一時的な要因のみならず、廃棄物発生抑制に向けた取組の影響を一定程度反映しているものと考えられる。

数量減少の主な要因としては、今年度より導入したリユースカップの使用が挙げられる。これにより、飲料提供に伴い発生していた使い捨て容器の廃棄が抑制され、結果として廃棄物全体の袋数削減につながったと推察される。また、リユースカップの導入により、来場者および出店者双方の廃棄物に対する意識向上が促され、適切な分別や無駄な廃棄の抑制にも一定の効果があった可能性がある。

加えて、イベント当日の天候条件も廃棄物発生量に影響を及ぼした要因の一つと考えられる。昨年度は2日間を通して晴天であったのに対し、今年度は2日目が雨模様となり、飲食出店の利用状況が昨年度と比較して低下していたと見受けられた。このことにより、飲食に伴う廃棄物の発生量が結果的に抑制された可能性がある。

以上の結果から、袋数という数量指標において、今年度は昨年度と比較して産業廃棄物量の減少が確認された。特に、リユースカップの導入は、使い捨て容器由来の廃棄物削減に寄与する施策として一定の効果を示したものと評価できる。今後も継続的にデータの蓄積および検証を行い、廃棄物削減施策の効果を多面的に把握していくことが重要である。

#### 4. 出店者（協力者）アンケート結果

※アンケート回答数：2

※回答は任意であり回答数が少なかったため、以下は参考としての報告となる。

##### （1）定量評価

###### 【オペレーション・回収関連】

提供時のオペレーションのしやすさ：3～4

回収場所の分かりやすさ：3～5

回収場所の説明のしやすさ：3～5

返却場所が分からないという問い合わせ：3～5

回収導線および表示の分かりにくさが、事業者の課題として確認された。

### 【収益・満足度】

収益への影響：3（影響なし～中立）

総合満足度：4（概ね好意的）

### （2）定性評価

#### 【評価された点】

- ・容器がしっかりしており、安っぽくない
- ・環境意識の高い来場者が自発的に選択する傾向が見られた
- ・事業者側での事前準備負担が少ない

環境配慮の取組として、ブランドイメージ向上に寄与しているとの評価が見られた。

#### 【課題】

- ・ゴミステーション表示が分かりにくい
- ・外国人来場者にとって視認性が低い

カップ自体よりも、回収・分別設計に関する不満が集中している。

### （3）今後の継続意向

リユースカップについては、今後も使用したいとの回答があった。

一方で、どんぶりや皿等の他のリユース食器については運用負荷や提供メニューとの相性を理由に不要とする意見が見られた。

## 5. 来場者アンケート結果

※アンケート回答数：8

※回答は任意であり回答数が少なかったため、以下は参考としての報告となる。

### （1）回答者属性

回答者の年齢層は30代から60代まで幅広く分布していた。

北区在住・在学・在勤者が多数を占める一方、区外からの来場者の回答も確認された。

### （2）リユースカップの評価

使い心地については、5段階評価で3～5の回答が大半を占め、概ね良好な評価が得られた。

自由記述では安定感がある、使いやすい、水滴が気になりにくい等の意見が得られた。

### （3）継続実施意向

次回イベントにおいてもリユースカップの実施を希望する回答が得られた。

一方、不要とする回答もあり運用面での課題が継続意向に影響している可能性が示唆される。

#### **(4) 運用面の評価と課題**

回収場所および案内表示については低評価が確認されており、本実証実験における課題である。また、どの店舗で利用可能か分からない、店舗側からの案内が不足しているとの指摘が多く見られた。

### **6. 総合評価**

リユースカップ自体の品質および使い心地については、事業者・来場者ともに概ね好意的な評価が得られた。

環境に配慮した取組である点が評価されており、施策としての意義は高いと考えられる。

特に、同等の商品・サービスであれば環境配慮を重視した選択をしたいと考える来場者層の存在が明らかとなった。

一方で、回収導線、案内表示、周知方法等の運用面については、改善の余地が大きいことが明らかとなった。

以上の結果から、リユース食器導入は品質面および環境配慮の観点では一定の成果を上げている一方で、運用方法や周知の在り方については改善の余地が大きいことが明らかとなった。今後の実施に向けては、これらの点を踏まえた検討が必要である

### **7. 今後に向けた考察**

次回以降の実施にあたっては、以下の点に留意することが重要である。

- ・リユースカップ利用可能店舗の明確な表示（統一サイン等）
- ・会場内回収場所および返却導線の分かりやすい案内
- ・店舗およびスタッフへの事前周知と運用ルールの徹底
- ・利用者目線に立った運用改善

リユース食器導入を一過性の取組とせず継続的な施策として定着させるためには、運営面・周知面の双方から改善を行う必要がある。

特に、来場者および事業者双方が迷わず理解できる仕組みづくりが重要である。

### **8. 主催者としての意見・感想**

本実証実験を通じて、飲食を伴うイベントにおけるリユース食器導入について一定の知見を得ることができた。一方で、主催者の立場から見ると今回の実施方法においては費用対効果の面で課題が残る結果となった。

具体的にはリユース食器のレンタル費用に加え、回収後の洗浄・管理に係る費用および産業廃棄物処理費用を合算した結果、リユース食器を使用していなかった昨年度と比較して全体の運営コストが増加している。環境負荷低減という目的は理解しつつも、単年度のイベン

ト運営においては現行の導入方法では経済的なメリットを十分に得ることは難しいと感じた。

また、分別および回収対応については運営スタッフが積極的に取り組んだことにより、未返却や紛失は比較的少数に抑えられたと考えられる。しかしその一方で、スタッフがリユース食器の分別や来場者への説明に注意を払う必要があり、本来の運営業務に加えて負担が生じていた場面も見受けられた。人的負担の増加という点も、今回の実証実験を通じて実感した課題の一つである。

これらのことから、リユース食器の導入は環境配慮の観点だけでなく、運営体制やコスト、人員配置を含めた総合的な検討が不可欠であると認識している。

## 9. 導入に向けた提言（主催者の立場から）

今後、リユース食器を本格的に導入・定着させていくためにはイベント全体として統一した運用ルールを設けることが重要である。具体的には、全ての飲食事業者に対し出店条件としてリユースカップの使用を必須とすることが有効であると考ええる。これにより対応店舗のばらつきをなくし、来場者にとっても分かりやすい仕組みを構築することができる。

また、主催者側のみが費用を負担するのではなく、飲食事業者にも一定の費用負担を求める仕組みを導入することで取組への当事者意識を高めるとともに、事業としての持続可能性を確保する必要があると考える。

さらに、分別および回収の円滑化に向けては、ゴミステーションや返却場所における案内表示の改善が不可欠である。より視認性の高いポップや統一したデザインのサインを作成し、来場者が直感的に理解できる導線を整備することでスタッフの人的負担軽減にもつながると考えられる。

加えて、事前の広報や会場内アナウンス等を通じてリユース食器の取組内容や返却方法について来場者へ十分に周知することも、今後の導入において重要である。

## 10. 実施風景

